

信頼は公開と選択から

厚生省発表の海外比較といえ、米・英・独・仏・日と相場が決まっています。こうした役所の資料だけでは見えてこない出生率の新しい変化に気づいたのは、スウェーデンの情報公開制度のおかげでした。

88年にスウェーデンを訪ねた時、日本と違って子どもたちが町にあふれているような気がしました。聞いてみると、「このところ保育所が足りなくなって対策におおわらわ」というのです。

貧乏旅行の私をいつも居候させてくださる原昭治さんに尋ねると、「統計情報部に行ったら、きっと正確なことがわかりますよ」と電話してくださいました。午後一番に訪ねると、すでに詳しい統計がファイルに収めて用意してありました。通りすがりの一外国人に対して、なんと行き届いた情報提供でしょう。資料には、80年代の後半から出生率が上がり始め、合計特殊出生率が2を超えそうになっている様子がグラフもまじえて示されていました。

日本に戻った私は、厚生省に、「これからは米英独仏以外の出生率も調べて公表してください」と申し入れました。

日本は、官庁が資料をしまいこみ、審議の過程を見せない国です。これでは国民は判断を誤ります。そこで社説で、再三再四、審議会の公開と資料の公表を求めました。薬の許認可を決める中央薬事審議会、診療報酬を決める中央医療保険審議会、人の死について審議する脳死臨調、遺伝子治療臨床研究中央評価会議、老人保健福祉審議会の公開を迫りました。

扉はほんの少しずつ開いていきました。まず、脳死臨調が議事録を公表するようになりました。ただし、発言者の名は伏せられていました。次に、遺伝子治療の中央評価会議が、会議そのものを公開しました。秘密にするより公開することで信頼を得ようとする初の試みでした。

『福祉が変わる・医療が変わる～日本を変えようとした70の社説+α』
(ぶどう社刊 初版1996・11・1)